セメスター制は学生の学修状況を改善したか
—文教大学国際学部の場合—

小　林　勝　法

Did Semester System Improve the Students' Learning Condition?
— In Case of the Faculty of International Studies, Bunkyo University —

Katsunori KOBAYASHI

Abstract

This paper reports on a Survey of Students' Learning Condition in the Faculty of International Studies, Bunkyo University. The Survey was conducted with questionnaires for all students except senior students during November and December 1999, and 59.7% of the students answered the above-mentioned questionnaires.

The results were as follows;

1) The students attach importance to attend class actually more than syllabuses when choosing courses to take. More than half of the students answered the contents of actual class were different from that of syllabuses, and they had experiences to quit registering after attending the first class.
2) Most of the students have a good attitude and motivation to learn.
3) About 10% of the students have gotten right to take classes over credit limit. Most of the students are eager to get the right.
4) The students are not so good at study skills.
5) One of the reason why the students do not read books enough is that they are not encouraged to read by teachers.
6) "Sports Ⅰ" and "Computer Basic Exercise" are highly estimated by freshmen. "Sports Ⅱ" and "International Communications" are highly estimated by sophomores. However more than 10% of them answered that there were no good classes to attend.

はじめに

文教大学国際学部のカリキュラムは1999年度にそれまでの通年制からセメスター制に移行した（1年生のみ。2、3年生は通年制のまま)。そして、それにともない以下のような科目履修上の変更を行った。

①通年4単位科目を春か秋のどちらかの学期に週2回授業の科目として開講した。

②履修登録できる単位数の上限を通年で50単位から半期で22単位に改めた。
③直前の学期で優秀な成績を修めた学生には上限を超えて履修登録できるようにした。具体的には、100点満点で80点以上（成績表の上ではAAまたはAと表記）の科目の単位数の合計が18単位以上の場合、次の学期で4単位多い26単位まで履修登録できることにした。
④第1回目の授業の時、時間を前後半に分け、その授業の概要説明だけを行うという初回授業二部制を廃止した。

これらの変更が学生の学修状況をどのように改善したのか、あるいは問題点は何かを明らかにする目的でアンケート調査を実施した。文教大学国際学部の1年生～3年生を対象として、1999年11月～12月に必修の授業で質問紙を配布し回収する方法で行った。調査した内容は、履修科目選択や良い成績を取ることに対する意識と実態、スタディスキルの習熟状況、受講して良かったと思う授業についてなどである。有効回答数と回収率は表1の通りであった。本稿では、その集計結果を報告する。

表1　有効回答数と回収率

1年生	167人	72.3%
2年生	142人	40.9%
3年生	123人	50.0%
計	432人	59.7%

1．授業が『授業概要』と食い違っている経験を半数の学生がもっている

実際の授業が『授業概要』に書いてあることと食い違った経験がある学生は50.4%と半数である（図1参照）。1年生は授業の経験が少ないからか、35.3%と少ないが、2年生が63.0%、3年生が57.6%と多くなっている。

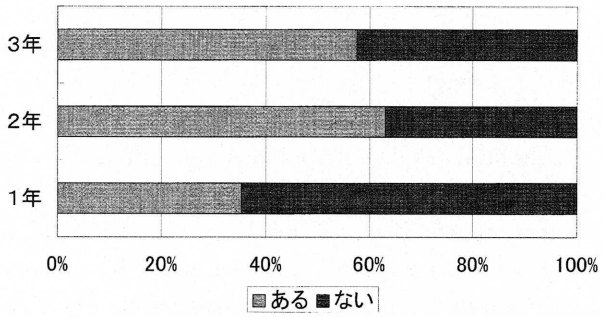

図1　『授業概要』との食い違いの経験

そして、その食い違った内容を複数回答で答えさせたところ、「授業内容」が最も多く64.7%で、次いで「授業の進め方」(48.9%)、「成績のつけ方」(13.0%）であった（図2参照)。

『授業概要』は1つの授業につきB5判1頁を割いて、授業概要と授業計画、評価方法、テキスト、参考書、受講者へのメッセージを書くことになっている。この内容が実際の授業と異なっているとしたら問題である。

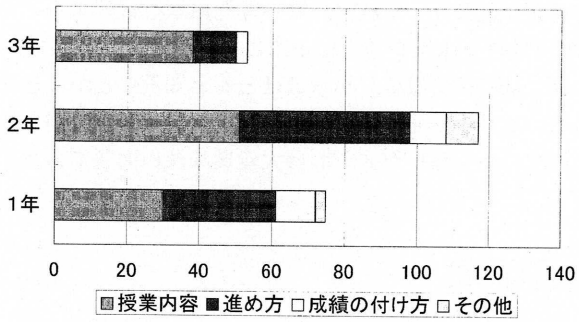

図2　食い違いの内容

しかし、『授業概要』の原稿を提出するのは前年度の1月である。春学期の授業は授業開始の3カ月前であるが、秋学期の授業では8カ月ほど前に授業計画を提出することになる。教員の中にはその間に授業計画をより良いものに練り直し、受講生の了承を得て変更している場合もあるかも知れない。したがって、計画変更、すなわち授業概要と異なることが一概には悪いともいえない。今回の調査では具体的にどのように食い違っていて不都合が生じたかについては調査していない。より詳細な調査が必要である。

しかし、このように食い違いの頻度が多いことが『授業概要』の信頼性を低めているとしたら問題である。原因を究明し何らかの方策を講じるべきである。

2．半数の学生が第1回目の授業に出て受講をやめたことがある

第1回目の授業に出て受講をやめたことがある学生は55.9%である。1年生でも52.1%もあり、3年生に至っては67.8%である（図3参照）。

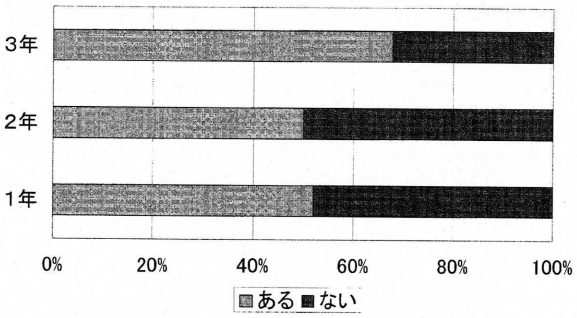

図3　第1回目の授業に出て受講をやめた経験

そして、受講をやめた理由としては、「『授業概要』を読んで自分がイメージした内容と異なったため」が最も多く50.3%で、次いで「教員の人柄を見て思うところがあって」(40.2%)、「『授業概要』を事前に読まなかったため」(27.2%)、「受講生が多すぎたため」(11.8%) である（図4参照)。『授業概要』を事前に読まなかったというのは論外であるが、理由の第1と第2は問題である。『授業概要』を読んでも、その授業を正確にイメージすることは学生には難しいのではなかろうか。限られ

たスペースに授業の内容を盛り込もうとすれば、勢い専門用語を羅列することになってしまいがちである。『授業概要』だけで授業の全体像を学生に正確に伝えることには限界があるのかも知れない。そして、教員の人柄については『授業概要』からはほとんど知ることができない。そして、この人柄から判断して受講をやめている学生が4割もいるのは驚きである。学生がどういう判断をしたのか、詳細には調査していないのでわからないが、これは大変興味深い問題である。

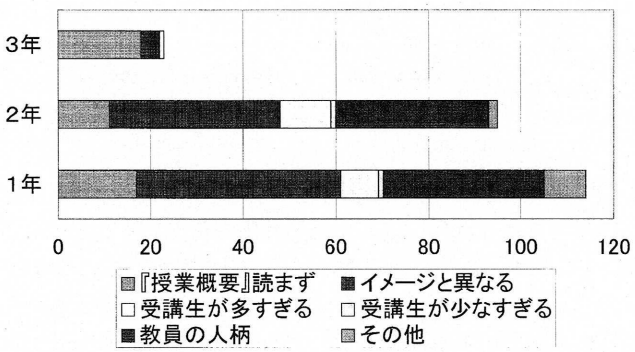

図4　受講をやめた理由

3．履修登録の参考情報として『授業概要』より第1回目の授業の方が利用されている

学生が履修科目を選択する際に使用する資料は、時間割表や『履修のてびき』、『授業概要』、第1回目の授業の印象、先輩や友人からの情報などである。学年によって必修と選択の科目の割合が異なるので、これらの参考情報源の中で、どれが多く利用されているかは、学年によって異なるが、全体としては、多い順に時間割表、『授業概要』、先輩や友人からの情報、『履修のてびき』、第1回目の授業の印象であった[1)]。

これらの参考情報源の中から公的なものであって、学生によって利用のしかたが異なると思われる『授業概要』、第1回目の授業、『教員紹介誌』について、どの程度情報を得られているかを3件法で尋ねた。その結果が図5である。これを見ると、総合的に第1回目の授業が優っていることがわかる。『授業概要』と比べるとすべての項目において優っている。『教員紹介誌』が優っている点は唯一「教員の専門領域や学識の深さ」である。

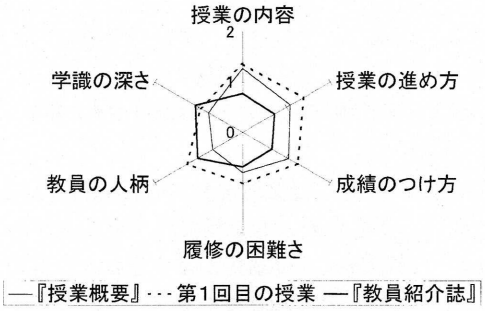

図5　履修登録の参考情報

以上の結果から、学生に満足のいく履修科目選択をさせるためには、第1回目の授業に出席してから履修登録をさせることが望ましいことがわかる。しかし、学生は遅刻したり欠席したりして、この制度を十分活用していない実態が明らかになった[2)]。それに、実質的に授業回数が減ってしまうことから、この制度は廃止になった。その結果、『授業概要』や『教員紹介誌』などの資料を十分に活用するように学生指導を徹底する必要性が一層高まっているといえる。

4．受講意識と態度は概ね真面目である

受講に対する意識や態度について4件法で尋ねた。その結果、学生は概ね真面目であるといえる。「なるべくいい成績を取りたいと思う」と答えたのは9割を超えている（図6参照）。学年別では1年生が意欲が高い。「授業内容よりもいい成績が取れそうな科目を優先して履修登録する」と答えたのは半数以下である（図7参照）。以上の結果から概ね意欲的であるといえよう。

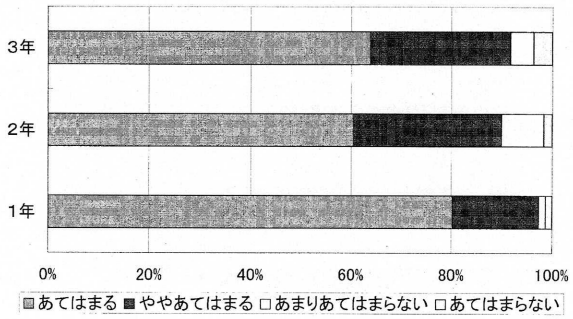

図6　なるべくいい成績を取りたいと思う

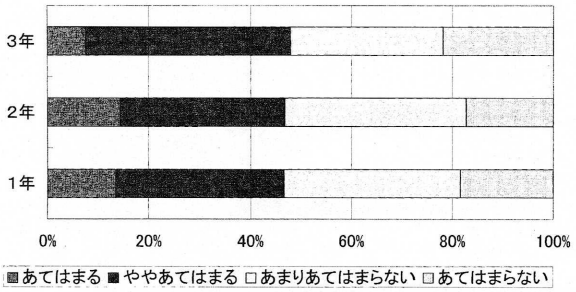

図7　授業内容よりもいい成績が取れそうな科目を優先する

「テキストはすぐに買いそろえる」と答えたのは半数を超えている（図8参照）。そして、「授業は皆勤をめざす」と答えたのは6割弱である（図9参照）。学年別では低学年ほど割合が多い。「授業中は私語をせず、先生の話に集中している」と答えたのは半数を超えている（図10参照）。それから、「ノートをきちんと取っている」と答えたのは8割弱である（図11参照）。以上の結果から学生は概ね真面目に授業に出席しているといえよう。

しかし、表1に示したように、2、3年生の回収率が50%以下と低いことを考慮すると、実態を正確に表していないと考えられる。このアンケート調査は必修の授業で実施した。したがって、回収率

がすなわち出席率である。必修の授業であるにもかかわらず低い出席率である。授業に出席している真面目な学生の回答であることを念頭に置いておく必要がある。

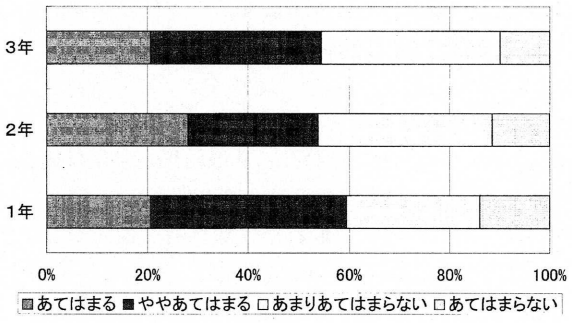

図8　テキストはすぐに買いそろえる

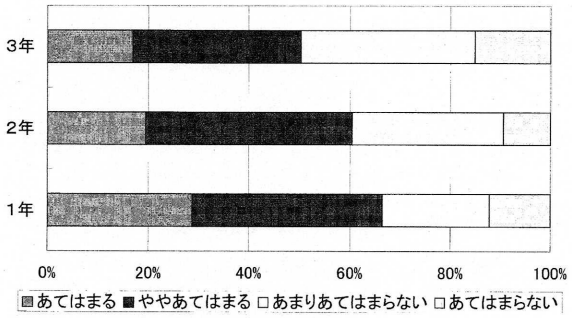

図9　授業は皆勤をめざす

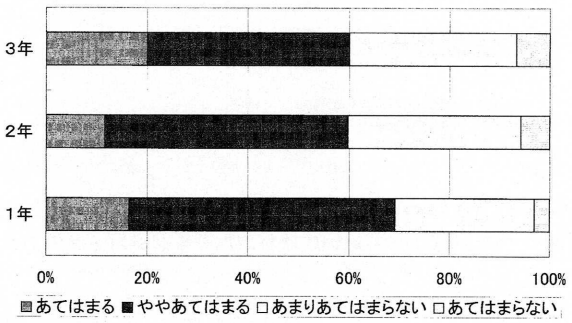

図10　私語をせず、先生の話に集中している

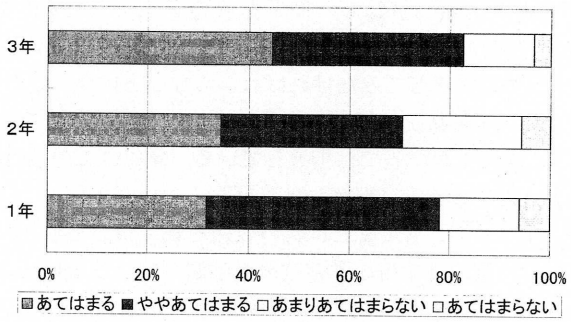

図11　ノートをきちんと取っている

5．履修登録単位数制限を緩和された優秀学生は1割強であるが、多くの学生が制限緩和されることを望んでいる

前述したように、セメスター制移行（1年生のみ）にともなって履修登録単位数の制限の緩和措置を講じた。春学期に優秀な成績を収めたため、秋学期に登録できる単位数制限を緩和された1年生は12.3%（20人）であった。そして、それらの学生が実際に、秋学期に登録した単位数は図12の通りである。制限が緩和されたからといって、22単位を超えて履修登録できる権利を全員が行使しているのではない。22単位を超えて履修登録した学生は、「できるだけ多くの科目を履修しようと思った」と答えているのに対し、そうでない学生は「取りたい科目だけにしぼった」と答えている。1人が「その他」と回答しているが、「少ない科目でも登録した以上は全科目単位を修得したいので」と記述している。堅実に単位取得しようとしている学生である。

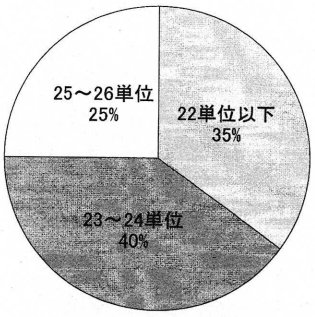

図12　優秀学生の登録単位数

そして、権利を得た学生だけでなく、得ていない学生に対しても、権利を得た場合どうするかを尋ねたところ、6割の学生が「できるだけ26単位を履修しようと思う」と答えているのに対し、4割弱の学生は「無理せずに、取りたい科目だけ履修しようと思う」と答えている。

国際学部の要卒単位数は124単位である。毎学期22単位ずつ修得していれば、3年間で取り終えることもできるので、急いで修得する必要はないのであるが、大半の学生は「できるだけ26単位を履修しよう」と思っている。通年で50単位までの時は、いわゆる「保険」をかける学生が多数いた。すなわち、取りあえず制限単位数いっぱいまで履修登録しておいて、実際の授業を見て、本当に履修する

か、しないかを決めるのである。履修登録した授業を放棄することを学生たちは、「捨てる」とか「切る」とかいっているが、本命の授業を捨てた時、保険の授業で修得単位数を確保しようとするのである。どのような授業か実際に受講してみなければわからないということも理解できなくはないが、名目の受講者数だけがふくれあがる状況は好ましくない。第一、単位制度を実質化するために履修登録単位数の制限を設けることを文部科学省では指導している。学生にこの趣旨を理解させるとともに、教員も楽勝科目をなくすよう授業の充実に努めなければならない。

それから、優秀な成績、すなわち、AA またはAの成績を18単位以上取りたいと思う学生がほとんどである。このことから、この制度は学生の学習意欲を喚起しているといえよう。しかし、8割の学生が実現は困難であると感じている。そして、実際に取るよう努力した学生は6割である（図13参照）。このように意欲と行動がともなわないのは無理もないことではあろうが、できるだけ多くの学生に意欲を持たせ努力させるための策を講じたいものである。

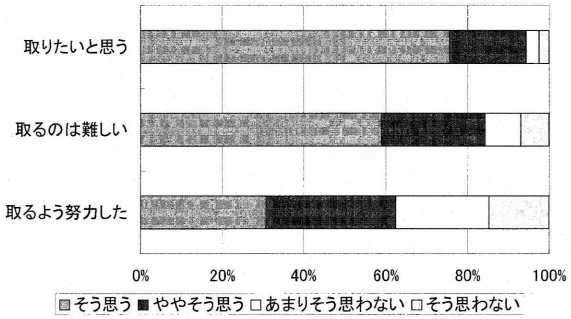

図13　優秀な成績

6．スタディスキルは上級学年ほど習熟している

学生のスタディスキルの習熟について尋ねた。まず、「ワープロでレポートを作成するのが苦にならない」と6割の学生が答えている（図14参照）。上級学年ほどその割合が高く、3年生では7割である。1年生では6割弱であることから、「コンピュータ基礎演習」の授業だけでワープロを習熟させるには限界があることをうかがわせる。ほかの授業で課されたレポート課題をこなすことで徐々に習熟しているものであろう。

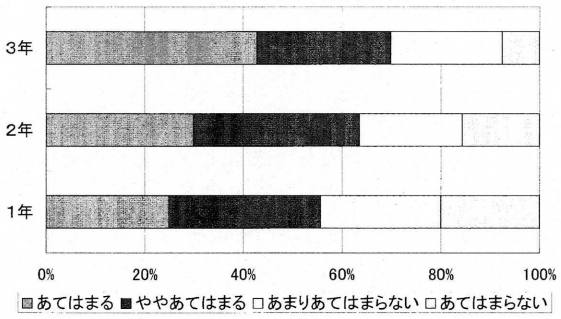

図14　ワープロでのレポート作成が苦にならない

「インターネットで情報検索ができる」と答えているのは8割である（図15参照）。1年生と3年生の割合が多い。2年生がどうして低いのか不明である。そして、「電子メールをやりとりできる」と答えているのは8割弱であり、1年生が最も多い（図16参照）。授業での学習によるのか、この調査では明らかにできない。

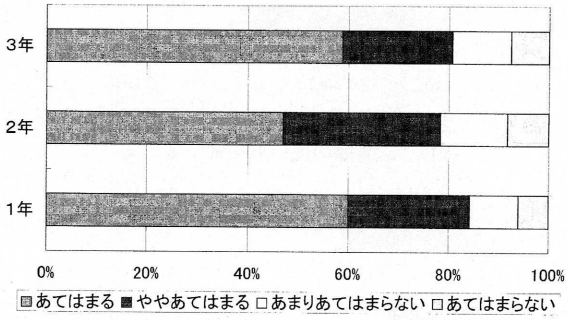

図15　インターネットで情報検索できる

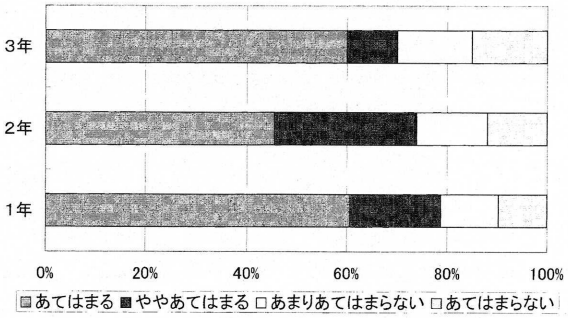

図16　電子メールをやりとりできる

その他のスタディスキルでは、「文献検索のしかたなど図書館の使い方を知っている」のは7割弱である（図17参照）。上級学年ほど知っている割合が多い。1年生が少ないのは無理もないことかも知れない。そして、「新聞をほぼ毎日読んでいる」割合は3割弱と少ない（図18参照）。これも上級学年ほど多く、1年生が2割強、2年生が3割弱、3年生が4割弱である。このアンケート調査をした11月ともなれば、3年生は就職先の選定を本格的にしている時期である。「新聞をほぼ毎日読んでいる」3年生が4割弱という状態では十分な企業研究と社会情勢の把握ができていないと思われる。下級学年から新聞を読ませるよう指導が必要である。

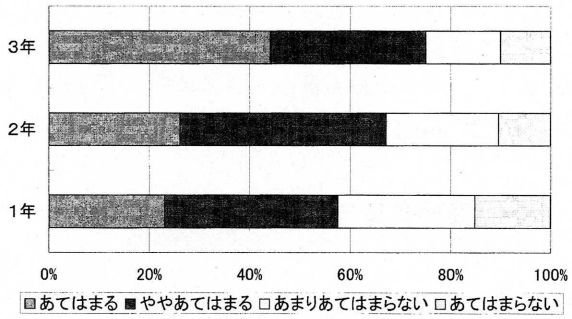

図17　図書館の使い方を知っている

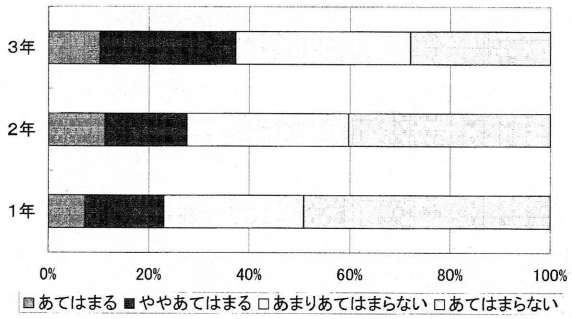

図18　新聞をほぼ毎日読んでいる

7．学生の読書数が少ない一因として授業で図書を紹介されていないことが挙げられる

春学期（4～7月）の間に完読した図書の数を尋ねた。図書には授業のテキストや参考書、その他の専門書や教養書、実用書、趣味の本などを含み、漫画や雑誌を除いた。完読した図書数の平均は、1年生が3.14冊、2年生が4.44冊、3年生が4.91冊である。どの学年もおしなべて少ない。0冊と答えた学生の割合は、1年生が22.8%、2年生が8.5%、3年生が9.8%である。

学生の読書数が少ないからといって学生だけを責めるわけにはいかない。同じ春学期に本の紹介や推薦を受けた授業について尋ねたところ、3割の学生が受けていない（図19参照）。教員が学生に読書させるようにどのような努力をしているか、反省をしなければならないだろう。

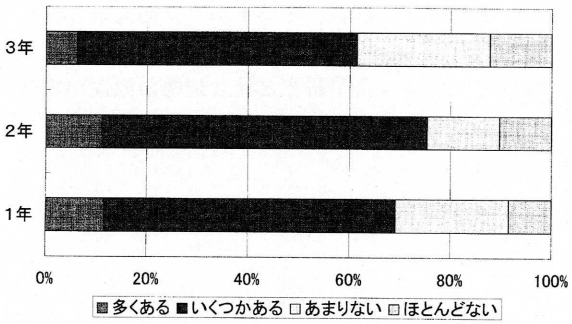

図19　本の紹介や推薦を受けた授業

そして、授業で紹介や推薦を受けた図書を何冊読んだかというとその平均は1年生が0.66冊、2年生が1.83冊、3年生が1.61冊である。0冊と答えた学生の割合は、1年生が63.5%、2年生が21.8%、3年生が29.5%である。1年生が多いのは専門科目の授業をほとんど受けておらず、語学や教養科目が多いからだと考えられる。2年以上になって専門科目が増えるにつれて関連図書を読む機会も増えるのだろうが、1年生のうちに基本的な文献を読む機会があっても良いと思う。

8．1割強の学生が「受けて良かった授業」が1つもないと回答している

入学してからこれまでに受けて良かったと思う授業を3つまで挙げさせ、その理由を尋ねた。まず、「受けて良かった授業」として挙げた授業数別の割合は表2に示す通りである。平均回答数は、1年生が2.1、2年生が1.4、3年生が2.0である。回答が0、すなわち、「受けて良かった授業」が1つもないとした学生は、1年生が11.4%、2年生が19.7%、3年生が10.6%である。これらの学生は、どのような思いで大学に通い授業に出席しているのだろうか。そして、どのような大学生活を送っているのであろうか。

表2　「受けて良かった授業」の回答数別割合

	0	1	2	3
1年生	11.4	21.6	16.8	50.3
2年生	19.4	17.6	25.4	37.3
3年生	10.6	22.8	26.8	39.8

学生が不本意修学で学習意欲がもともと低いといって片づけてしまうのは簡単なことであるが、教員としては、こういう学生をもどうにかして学問の世界に導きたいと思う。まず、この数字を少しでも低くすることが、我々教員の責務である。そのためには、第一に授業をもっと良くすること、「良い授業」を増やすことである。それと同時に、学ぶ環境を整えることも重要である。大学に、授業に行くのが楽しいと思えるようにさせなければならない。それには、親しい仲間をつくることや尊敬できる教員との出会いなどが重要である。そのような目的で2000年度から新設された基礎ゼミナール（1年次必修）では、友人作りの良い機会となっている[3)]。

「受けて良かった授業」が1つもないと回答した学生は2年生が最も多い。2年生は大学での授業に対し余り意欲的でないのではないかと懸念される。4年間の大学生活の中で2年次は中だるみし、学習意欲が減退する時期であるといわれるが、その通りなのであろうか。あるいは、入学年度ごとの学生の「質」の相違によることなのか。これだけの調査からは判断できない。

9．1年生では「スポーツ実技Ⅰ」と「コンピュータ基礎演習」が評価されている

「受けて良かった授業」の理由を4つの選択肢の中から選ばせた（複数回答可）。その4つとは、「ためになった」「面白かった」「先生が良かった」「その他」である。そして、この理由の回答数を獲得得点として授業ごとに集計しランキングした結果が表3である。

表３　「受けて良かった授業」ベスト３

	１位	２位	３位
１年生	スポーツ実技Ⅰ(79)	コンピュータ基礎演習(78)	英語Ⅳ(42)
２年生	国際コミュニケーション論(44)	スポーツ実技Ⅱ(42)	英語Ⅳ(25)
３年生	人間科学環境(28)	観光学概論(21)	経営管理Ⅰ(20)

（　）内は得点

１年生は必修科目が多く、語学と体育、必修の専門科目で履修登録単位数の半分が占められている。自由に選択できるのは、共通教養科目（12科目）と学部教養科目（16科目）、２つの選択専門科目だけであり、選択の幅が他の学年と比べて狭い。その中で、堂々ベスト１に輝いたのは「スポーツ実技Ⅰ」である。意外でもあるが、いまどきの学生はこんなものかも知れない。担当教員別の獲得点数を見てみると、大きなばらつきはないので、「良かった授業」と評価された要因は、教員個人の特性によるものではなく、科目特性によるものであろう。得点の内訳を見ると、最も高いのが「面白かった」(35点）であり、この得点は、他のどの科目よりも高い。「スポーツ実技Ⅰ」の科目特性として顕著な点である。この科目が、仲間づくりに役立ち、学園生活を楽しくさせている要因の１つとも考えられよう。１年次にあっては、重要な科目となっている。

体育というとただ楽しく遊ばせているだけと思われることが多いが、それは誤解であることがこの調査から明らかにわかる。というのは「ためになった」が13点で、これは、「コンピュータ基礎演習」以外のどの科目よりも高い。語学や教養科目、専門科目よりも高く評価されているのである。その１つの理由として、「スポーツ実技Ⅰ」では、一気飲みや喫煙、食生活、エイズに関する課題を課していることが挙げられよう。期末に実施する学生による授業評価の結果を見ても高く評価されていることがうかがえる。

「コンピュータ基礎演習」は僅差でベスト１を逃したものの、「ためになった」は45点と他の科目を圧倒している。ワープロやインターネットを使った情報検索などは大学での学修に必須であることから、このような評価が得られたのであろう。担当教員別の獲得点数に大きなばらつきはないので、「良かった授業」と評価された要因は、教員個人の特性によるものではなく、科目特性によるものであると判断できる。

ベスト３は「英語Ⅳ」であった。担当教員別の獲得点数を見てみると、１人の教員が35点と大半を獲得している。「良かった授業」と評価された要因は、科目特性によるものであるのか、教員個人の特性によるものあるのか、判断できない。

10.　２年生では「国際コミュニケーション論」と「スポーツ実技Ⅱ」が評価されている

２年生は、１年生に比べると履修登録単位数の制限が通年で50単位と緩やかであることから、数多くの専門科目を履修している。その結果、「受けて良かった授業」が少数の科目に集中した１年生に対し、２年生はばらつくことになったと思われる。

堂々ベスト１に輝いたのは「国際コミュニケーション論」である。これは、２年次唯一の学部必修専門科目であるから、他の専門科目に比べると格段に受講者数が多い。150人を超える授業は学生の満足度が低いという調査結果があるが、大規模授業であるにもかかわらずこれだけ学生から支持されている。得点の内訳を見ると、「ためになった」が最も高く17点であり、教員のキャラクターや授業の面白さだけではないことがわかる。このことからも、この授業は国際学部の教育に重要な意味を持っているといえよう。

僅か２点差でベスト２になったのは、「スポーツ実技Ⅱ」である。１年生に続いて「スポーツ実技」が支持された。２年次にあっても重要な科目となっている。「スポーツ実技Ⅰ」と同じように、仲間づくりに役

立ち、学園生活を楽しくさせている要因の１つとも考えられよう。

ベスト３は「英語Ⅳ」である。担当教員別の獲得点数を見てみると、１人の先生が21点と大半を獲得している。「良かった授業」と評価された要因は、科目特性によるものであるのか、教員個人の特性によるものあるのか、判断ができない。

11. ３年生では専門科目が評価されている

３年生では、「受けて良かった授業」の上位10科目のうち、専門教育科目が７科目を占めた。授業の専門性が高くなり、大規模授業はなくなるので、大量得点を稼ぐ授業が少なくなる。ベスト１の「人間科学環境」とベスト３の「経営管理Ⅰ」は学系必修科目であり、受講者が比較的多い授業である。ベスト２の「観光学概論」とベスト５（得点16）の「スポーツ実技Ⅱ」は、２年次に開講されている科目である。ベスト４は得点17の「ゼミナールⅠ」で、７つのゼミナールの合計である。

12. 教員ベスト10に２人の非常勤講師がランクされている

「受けて良かった授業」を教員個人別に集計した結果を表４に示す。専任教員は非常勤講師よりたくさんの科目を担当しているので上位に名を連ねるのが当然である。しかし、ベスト10には２人の非常勤講師がランクされている。それは、第３位のＡ氏と第９位のＦ氏である。ただし、Ａ氏は元専任教員である。ベスト20まで見てみると21人中６人が非常勤講師である。専任教員はもっと頑張らなければならないのではないだろうか。

表４　教員個人別ランキング

	教員名（得点）	主な担当科目
第１位	Ｋ（83）	スポーツ実技
第２位	Ｙ（63）	国際コミュニケーション論
第３位	Ａ（61）	国際学概論
第４位	Ｉ（55）	地理
第５位	Ｗ（52）	コンピュータ基礎演習
第６位	Ｆ（49）	コンピュータ基礎演習
第７位	Ｔ（46）	国際関係史
第８位	Ｓ（44）	法学
第９位	Ｆ（43）	英語Ⅳ
第10位	Ｍ（42）	経営学

まとめ

学生の学修実態を把握すること、特に、セメスター制移行にともない実施した「履修登録単位数制限とその緩和措置」や初回授業二部制の廃止などが学生の学修状況をどのように改善したのか、あるいは問題点は何かを明らかにすることを目的として、国際学部１年生～３年生を対象にアンケート調査を実施した。その結果は以下の通りである。

１）学生は履修登録の参考情報として『授業概要』より第１回目の授業の方を利用しており、実際の授

業が『授業概要』に書いてあることと食い違った経験や第1回目の授業に出て受講をやめたことがある学生が半数もいる。このことから、初回授業二部制を廃止した今となっては、学生に『授業概要』を十分活用するように指導を徹底する必要があるし、実際の授業と『授業概要』がどのように食い違っているのか詳しく調べ改善する必要がある。

2）学生の受講意識と態度は概ね真面目であるといえる。

3）履修登録単位数制限を緩和された優秀学生は1割強であるが、多くの学生が制限緩和されることを望んでいることから、この制度は学生の学習意欲を喚起しているといえよう。しかし、実際には十分な努力がなされていないので何らかの策を講じた方がよい。

4）スタディスキルは上級学年ほど習熟しているものの、十分とはいえない。

5）学生の読書数が少ない一因として授業で図書を紹介されていないことが挙げられるので、教員の努力が必要である。

6）1割強の学生が「受けて良かった授業」が1つもないと回答していることや教員ベスト20に6人の非常勤講師がランクされていることから、専任教員は良い授業をするよう努力する必要がある。「受けて良かった授業」と評価されたのは、1年生では「スポーツ実技Ⅰ」と「コンピュータ基礎演習」、2年生では「国際コミュニケーション論」と「スポーツ実技Ⅱ」、3年生では専門科目であった。

（付記）本研究は、文教大学国際学部共同研究費（1999年度）の助成を受けた「大学導入期教育の充実に関する研究」（研究代表者：小林勝法）の一環として行ったものである。

文献

1）小林勝法ほか、「国際学部学園生活調査報告」、『文教大学国際学部紀要』第4巻、105-135、1994

2）小林勝法、「初回授業2部制導入の失敗」、『文教大学国際学部紀要』第11巻1号、149-158、2000

3）小林勝法ほか、「基礎ゼミナールの目的と実際」、『文教大学国際学部紀要』第12巻第2号、99-115、2002